その者を引きずり出せ

歌月　碧威

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
その者を引きずり出せ

【Ｎコード】
Ｎ１５３７Ｍ

【作者名】
歌月　碧威

【あらすじ】
異世界召喚って言ったら、普通女神とかとして崇められたり、溺愛逆ハーコースじゃない？
それなのに、私が召喚された理由が「部屋に閉じこもって出てこない魔王様を引きずり出してでも連れてこい」だと！？
ただそれだけのために召喚された美咲のお話。

＊続編始めました＊

『その者を追い返せ』　ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ３５４９ｏ／

1　はじまり

私が経済学部とかだったら、こういうのなんとかできたのかな？
私はかれこれ数分間、書類と睨みあっていた。
たけどこのマイナスの数字をプラスもしくは、前と同じにする方法なんて思いつかない。

手にしている財源表の数字はここ半年で急激に減っていた。
これをどうにか出来るなら、きっとこの会議室にいる連中がとっくにしているはず。
なんせ彼らは会計のプロフェッショナルだから。
……まぁ、魔界限定だけど。

「美咲様。何かよい策は浮かびましたか？」
対面するように円卓に座っていた人物に声をかけられる。
その人は青い髪のおかっぱ姿で、ずれた丸眼鏡を手で直していた。
彼の恰好はTシャツにデニムという良く見かけられる格好ではなく、まるで中世のヨーロッパの貴族のような格好をしている。
彼だけじゃない。円卓に座る人達は全てそのような格好だ。

しかも円卓を囲む顔ぶれは、かなりのイケメン達。
私の世界だときっと持てはやされるはずの容姿だが、この世界ではこういう人達が多い。
もちろん城で見るメイドさんや女中も美人ぞろいだ。

だから私、『田中（たなか）　美咲（みさき）』はこの世界だと浮く。かなり。
一応自分でフォローしておくが、私は良くも悪くもない平凡だ。
ここにいる人達が無駄に顔が良すぎるから、浮いてしまうだけ。

容姿だけじゃない。服なんかもそうだけど、私の全てがここでは異質な存在。
だってこの世界は私の世界じゃない。
一週間前に私は、ここ魔界に異世界召喚されてきたのだから。
しかも普通異世界召喚って言ったら、妃候補や女神とかの逆ハー溺愛コースって思うじゃん？
それなのに私の場合――

2　何気に失礼な人達

私が魔界に初めて来たときは、突然だった。
自分の部屋で寝ていたのに、なぜか起きたら見ず知らずの場所に居たのだ。
しかもなぜか見ず知らずのイケメン達に囲まれて。
最初彼らを見た時、古い外国の夢でも見ているのかと思った。
だって、「ここ、中世のヨーロッパか何処か？」と思うような貴族の服や鎧を着た人達がいたし、
私がいる場所もゲームでみるようなお城の一室のような感じだったから。

何、夢……？しかも、この人達カッコイイ。
っていうか、私だけこれ！？夢ならせめてドレスとか着せて！！
彼らの格好と自分の格好を見て、とっさにジャージ姿である事を悔やんでいた。
しかもこれいつも寝るときに着るジャージじゃん。しかも、そろそろ寿命のやつ。
急に自分の格好がみずほらしく思えてきた。
そんな私のちょっとした乙女心を気にすることなく、その人達は私の前にしゃがみこみ、私の顔を覗きこむ。
そして、「良かった。この顔なら魔王様も大丈夫だろう」と口ぐちに言った。

「魔王？」
私の呟きに、七・八人いたイケメンのうち青いおかっぱの丸メガネの男が口を開く。
「あぁ、貴方はまだ知らないんですよね。魔王様は、この魔界を統べている尊きお方でございます。貴方には魔王様を部屋から連れて

来て頂きたいのです」
「は？そんな事自分でやればいいじゃない」
夢ならもっと良い夢みせてよ。
部屋にいる人呼んでくるとかじゃなくてさ～。

「それが出来れば苦労なんかしねぇんだよ」
いかにも「あんた職業騎士でしょ？」って感じの鎧を着た男が、腕を組んでこっちを見下ろしてため息を吐きだした。
腰にさしている剣が大きく、この男の力の強さが気になる。

「リフ、そんな言い方はよくありません。私どももそうしたいのは山々なんです。ですが、魔王様はとある理由により部屋から出なくなってしまったのです」
「は？何で？」
「この魔界では、魔王様の花嫁は異世界より召喚した選ばれし女神と決まっているのです。我が王にも半年前に女神が召喚されました。それはそれはこの世の者とは思えない美貌で、魔王様にも負けぬような方です」
へ～。この人達もそうとうレベル高いと思うけどな～。
私は、ぐるりとあたりを見渡してそう思った。
たまに耳が尖っている人もいるけど、夢だし魔界だしと気にもとめない。

「実はその女神が、今回の原因を作りだしたのです」
「あ～、わかった。その女神に夢中で、魔王様は部屋から出てこないって事でしょ？」
あきれた。職務放棄で女とイチャついているなんて。

「いえ。女神はこちらの世界の人間界にいます。ありがたい事に、エラベラという大国の王子が女神を見染められたのです。恋は盲目

ですね。もし姫を渡さないなら、争いをするとまでおっしゃって。人間と魔族なんて戦うまでもないぐらい力の差があるのに。実に愚かな者です」
「え？渡していいの？女神なんでしょ？」
「いいんだよ」
さっきの見るからに騎士が、口を挟む。

「あの女は女神だというのを良い事に、金を湯水のように使ってたからな。しかも、我儘言い放題。まぁ、女神だからっていう理由で好き放題させていた俺らも悪いが」
「女神のせいで国家財源の三分の一が消えました。たった半年で。その上、気にいらない者を次々に城から追い出したり……。他にも悪事を働き、魔界をかきまわしました。ほんとこの半年さんざんでしたね」
うわ～。悪女だったんだ。
思わず同情の目を向けてしまう。

「幸いな事に女神も魔界があきたのか、王子と人間界にあっさりと行きました。魔王様はその隙に、女神が二度と魔界に戻って来れないようにと魔界と人間界の門を閉じ、国交を断絶してしまったのです」
「え？行ったり来たり出来るの？」
「えぇ。安全上の都合、人間がこちらに来る事はできません。ほら、魔獣に食べられたら大変でしょ」
ふ～ん。魔王って勇者に倒されるイメージとかあったから意外。
でも行き成り断絶って不味くない？
事前通告してくれてるならともかく。
絶対、困る人もいるよね。

「それで、魔王様はどうして部屋から出ないの？せったく追い出し

たのに」
「美形嫌いになってしまったのです。女神が美しかったので、美人や美形が怖くなってしまったらしく、我々も畏怖の対象になってしまいました。この魔界はやたら顔が整っている者が多いんです。……まったく、ご自分の方が整ってらっしゃるのに」
自分達が顔が良いってこの人達、自覚あるんだ。

「たしかに、貴方達はかなり容姿良いと思うよ。でもそれと私、なんの関係があ……――」
言いかけて頭によぎった。
ちょっと待て。
この人達、私の顔見て『良かった。この顔なら魔王様も大丈夫だろう』って言わなかった？

――それって！！

「あんた達、夢だからって人バカにすんのもいいかげんにしてよね！！」
大声でそう怒鳴った時だった。
窓もない部屋の唯一のドアが開けられ、これまた綺麗なお姉さんが姿を現した。
黒のロング丈のベアワンピースにスリットが入れられ、網タイツに覆われた美脚。
やばい。つい衣装と胸に目がいってしまう。
だって、体のラインが出るドレスにあの巨乳だよ！？
見るなっていう方が無理でしょ！！
あぁ。あの胸、半分別けて欲しい……

「バカになどしてませんわ。私の予言は外れる事はありませんの。貴方なら、魔王様をあの部屋から出して頂けると出ております。そ

のために、私が貴方を召喚したんですもの。それと言っておきますけど、これは夢ではありませんわよ」
え。夢じゃない？
んなわけない。こんな美形や美人ばっかりの世界なんてあるわけない。

「初めまして、美咲。私、シリウスと申します。見ての通り魔女ですわ」
いや、わかんないだろ！！というツッコミは私だけか？
「シリウス。魔王様の結界の方は？」
「やはり私の力では破る事など不可能ですわ、グレイル。あの方は、この世で一番の力を持つお方ですもの」
「そうですか……。我々だけで魔王様の仕事をフォローするのはそろそろ限界に近いんですが」
グレイルと呼ばれた、眼鏡をかけた青い髪のおかっぱはうな垂れた。

「あら、大丈夫ですわ。美咲がいるじゃありませんか。ちゃんと魔王様を私たちの元へ連れてきてくれるわよね？」
いや、同意を求められても。
わけのわからなくなっていく状況に、頭の片隅で早く目覚める事を望んだ。

3　結界はいとも簡単に

「――って事は、これは本当に夢じゃないって事？」
「残念ながら」
シリウスの返事に、頭を抱えた。
なんで予言に私が出てくんのよ……

今回の騒動は私が解決出来るらしい。
でもそれはあくまでシリウスの予言の中の話だ。
私はその予言のせいで、召喚されたてしまった。

普通、異世界召喚なら妃候補や女神とかの逆ハー溺愛コースってあるはずだよね？
それが一切なくて、魔王を部屋から連れてこいって話だけかよ。

「大学とかバイトとかもあるんですよ」
出来れば事前連絡入れてほしい。さすがにいきなり召喚は困る。
こっちにはこっちの生活あるんだし。
私はこの間大学の入学式を迎えたばかりだ。
一人暮らしをしながら大学に通っている。
家からの仕送りは一切なく、自分でバイト代を生活費に充てていた。
そのため、一日でも休むとキツイ。

「安心して。魔王様なら、貴方をすぐに元の世界に返す事が出来るわ。だから魔王様の元に行って、私たちの元に引きずり出して来て欲しいの」
「引きずり出してって…。魔王っていうから男ですよね？力じゃ勝てないでしょ」
「あら、大丈夫よ。私の予言は外れないもの。それじゃあ、お願い

ね。ここから先は、私達は先に勧めないの」
「は？」
足を止めるシリウスに首を傾げた。
だって、目の前には何の障害もない長広い廊下だったのだから。

「強力な結界がはってあるんですよ」
隣にいたグレイルが手を伸ばす。
「結界？」
「ええ。この結界はただ容姿の整っている者を通さないだけの結界なんで、美咲様なら結界は意味がないはずです。魔王様の部屋までは、このルルが案内いたしますのでついて行って下さい」
そう言ったグレイルを殴りたかったが、ぐっと堪えた。
これも帰るためだ。
早く帰りたい。

「ところで、ルルって？」
「はいっ。ぼくです！！」
「ん？」
声のした足元に目を向けると、トカゲが二本足で立っていた。
いや違う。トカゲじゃない。
これは――

「ドラゴン……？」
「はいっ。そうです。ルルはどらごんでしゅ」
そこに居たのは羽の生えたトカゲじゃなく、小さいドラゴンだった。
ちゃんと話せないには、まだ幼いからだろうか？
私はそっとルルを抱っこした。

「ルルっていうの？」
「はいっ。みちゃきさま」

うわ～。これすっげぇ可愛い。
手のひらサイズのルルは、宝石のような青い目でこっちを見ている。
マグカップの方が大きいかも。

「ルルはまだ幼く、人型にはなれないんです。そのため、この結界を潜る事ができるんですよ」
「そうなんだ。じゃあさっそく行こうか、ルル」
私はシリウスとグレイルに手を振り、別れを告げると足を進めた。
悲しい事に、やっぱり私にはこの結界は意味がなかったようだ。

4　魔王もやっぱり失礼な奴

ここかぁ。
ルルが連れて来てくれたのは、赤い扉の前だった。
細かい彫刻の彫られた赤い扉には、ゴールドの取手が付いている。

一応ノックとかしないといけないよね？
私は掌を軽くグーにし、ドアをコンコンと叩く。
すると中から、「誰だ！！」という声がきこえてきた。

「あの～、初めまして。田中美咲って言います。異世界から来ました」
「いっ、異世界だと！？」
自己紹介に裏返った声が返ってきた。
あ～。例の女神様も異世界からきたんだっけ。

「あの～、開けてくれない？」
「かっ、帰れ！！」
「それが帰れないんだってば」
「おぬし一体どうやってここまで来たのだ！？余の結界が張ってあるはず」
「――お前、それ聞くか？」
声が尖ってしまうのもしょうがない。
この世界に来てからずっとバカにされている気がしてしょうがないのだ。
魔界のやつらは失礼な奴ばっかり多すぎる。

「……なぜそなたは怒っておるのだ？」
「怒るに決まってるでしょうが！！あんた達は人をバカにしすぎな

のよ！！
大体、普通で悪いか？何事も平凡がいいでしょ！？」
「ちょっと待て。よくわからん」
「よくわかんないのは、私の方！！いきなり異世界召喚とかされても迷惑。そもそも元はと言えばあんたが悪いのよ！！大体、何よ。顔が整っている奴を入れなくする結界って！！入れた私は何なのよ！！」
「――整ってなかったんじゃないのか？余の結界は完璧だ。例外はないぞ」
「まおうちゃま！！」
ルルが魔王を咎めてくれたが、魔王はわかってないらしく「どうした？ルル」と暢気に言った。

あれか？魔界の奴は、空気が読めないのか？
そうだよな。思えば最初っから失礼な奴ばかりだったもんね。
思いだしたら、血管が切れそうなぐらい血が昇ってきた。

「開けろ、魔王」
ガンガンと扉を蹴り続ける。
もう壊れても知らない。
「や、辞めるのだ！！扉が壊れてしまうだろう！！」
「知るか。どうせ魔法とかで直せるんでしょ」
「直せるが、わざわざ壊す事もないと思わないか」
「思わない。この扉ぶっ壊して、あんた引きずりだして元の世界に帰ってやる」
こんな言いあいが、何分が続いたかわからない。
だが根負けしたのか、魔王が白旗を掲げた。
「……わかった。開ける！！開けるから蹴らないでくれ！！」
魔王の声に少し遅れて扉が開く。

するとそこには黒いマントを羽織った長身の男が立っていた。
長い漆黒の髪は邪魔にならないように束ねられ、毛穴なんてあるの？ってぐらいキメが整っている肌、そしてあのイケメン軍団に負けないぐらいのその容姿。
もしこの魔王が薔薇の花束を持ち、キザな台詞を吐いたとしても違和感なんてないだろう。

これが魔王様……？
身長高っ。１８０？いや、１９０以上はあるはず。
しかも、何か良い香りがするし。

「そなたは――」
魔王の大きい目が開かれ、紫の瞳に私が映し出された。
えっ。何？これって、もしかして――
一目ぼれされるパターン？

「あぁ。これだ。これなのだ。余が求めていたのは。この街を歩いても背景に溶け込むような顔立ち」
「あんた、バカにしてんの？」
この失礼な魔王より、まさか一目ぼれ？なんて思った自分を殴りたい。
いやむしろ、立てなくなるまで殴り倒したい。

「バカになどしておらん。この地味な顔立ち落ち着くではないか」
「お前、顔が良いからって調子にのんなよ」
なんかここにいると、段々口悪くなってくる。

「何を怒っておるのだ？さ、中へと入るがよい。お茶を出そう」
私はそう言われ、扉の中へと招かれた。
せっかくのお誘いに、私はなんの躊躇いもなく入室した。

5　私、結婚します

へ～。やっぱ広い。
何畳ぐらいかな？二十五メートルプールは、らくらく入るだろう。
机と無数の本棚。それからソファに、サイドテーブルと十人以上は寝れるぐらいの大きいベット。
一度でいいから、ああいうベットで眠ってみたいな～。
私は魔王の隣りのソファに座りながら、そんな室内を見回していた。

「そんなにこの部屋が珍しいか？」
「うん。ここ広いもん。私の部屋なんて、六畳だよ」
しかも他にも部屋あるし。
左右の壁には扉がついている。
どうやら他の部屋にも続いているようだ。

「そなた、名はなんと申す？」
「田中美咲」
「ほう。美咲か」
ほんとにこれが魔王？
なんていうか、穏やかオーラ全開なんですけど。
紅茶をいれてくれた上に、お菓子まである。
まるで縁側でまったりとお茶している気分になってきた。

「要件だけ言うけど、魔王」
「なんだ？」
「早くこの部屋から出て、執務に戻って。そして、さっさと私を元の世界に戻して」
「外は嫌だ」

急に魔王のテンションが急降下した。
一体、女神様とやらに何をされたの？
「ねぇ。女神様になにされたかわかんないけど、みんな外で貴方の事待ってるんだよ。あの人達はたしかに顔が良いけど、女神とは違う」
「……わかっておる」
「わかってないよ。あの人達の事信じられないの？今まで、あなたと一緒に働いて来たんでしょ。それに、貴方はこの魔界で一番偉い人なんだから、ちゃんと仕事しなきゃ。民だって部下だって困ってるよ。税金払ってるんだし」
魔界に税金なんてあるかわかんないけど。
「……。」
魔王は何も言わず、ただ俯いてしまった。

「余が怖いのはあやつらではない。あの女が戻ってくるかもしれないのが怖いのだ。だから、わざわざここに近づけないように結界を張った」
「えっ。でも、魔界と人間界の扉は閉じたって聞いたよ？だったら――」
「おぬしはわかっておらん。あやつの恐ろしさを」
ちょっと～、女神さん。ほんと貴方何をしたんですか？
魔王は青ざめ、ガタガタと震え始めた。

「余は絶対に嫌だ。顔も見たくない。あの女の存在を記憶から消し去ってしまいたい」
ほんと何したの？女神さん。
「そのようなやつと結婚するなんて余は絶対に嫌だ」
「別に結婚しろなんて言ってないでしょ」
「しなければならないのだ。魔界で魔王は女神との婚姻以外認めて

おらん」
「なら、他の人と結婚したら？私みたいに、異世界から呼べるんでしょ？私の世界そんな悪女めったにいないから、次召喚した子なら大丈夫じゃないかな？」
「……。」
魔王は急に黙り始めた。
やっぱ無理か～。
女神として召喚したんだもんね。

「ごめん。やっぱそんな都合よくいかないよね。女神は一人だけだし」
「……いや。それは良いアイディアだ。美咲、そなたが余と結婚すれば良いのだ！！」
魔王は憑き物が落ちたような顔でこっちを見ている。
さっきと違い、表情が明るい。
「はいっ！？なんでそうなるのよ。第一、私は女神として召喚されたわけじゃないってば。あなたをここから出すために召喚されたの」
「問題ない。女神補欠という事にでもしておこう。魔界は一婦制。余がそなたと結婚すれば、あの女と結婚しなくてもよい」
なんか妥協した感が見えてしょうがない。
というか、そもそもそんな簡単に決めていいの？

「そなたが余と結婚してくれるのなら、余が外へ出よう。そして、そなたを元の世界へと戻そう。どうする？戻りたくないのか？」
「結婚すれば戻してくれるの？」
「あぁ」
仮にこっちで結婚したとしても、私の世界では未婚。
それに戻ってしまえば、私とは全然関係なくなる。
ということは――

「わかった。結婚する。だから、外に出て。そして、私を元の世界に返して」

6　それは最初から決まっていたこと

王座の間。
そこの上座には数段の階段あがり、その上に一つのイスがポツンと置かれている。
茶色のベルベットに銀の細工のフレームのイス。
そのイスは久方ぶりに自分の主に座って貰っていた。

「長い間迷惑かけて済まない、皆の者」
膝まづいているシリウス達に対して、魔王は深く頭を下げた。
私も階段下に行って膝まづいた方がいいのかな？
私が立っているのは魔王のイスの傍。
魔王に連れられここに来ちゃったんだけど、いまいち自分の立場が把握できない。
魔王って一番偉いんだから、やっぱ私って下なのかも。庶民だし。
そう思い階段を降りようとしたら、魔王に呼ばれてしまう。

「美咲、どこへ行く？」
「どこってシリウス達のところだけど」
「なぜ？」
なぜって……
私、上にいた方がいいのかな？
首を傾げ魔王を見る。
すると、羽も生えてないのに体が勝手に浮いてしまった。
何っ！？空中浮遊っ！？
ほんの数秒ほどの空中散歩は、魔王の膝の上で終わりを迎える。

「気付かずにすまぬ。立ちっぱなしだったな」
はいっ！？

なぜか、魔王は私が疲れたから下に行くのだと思ったらしい。
たしかに下には左右の壁に数個ずつイスの背がつくように並べられているイスがある。
でも、もし仮に私がイスを探していると思ったのなら、膝の上に座らせるんじゃなく、イスをさっきの魔法でここまで運んでほしい。

「魔王。あのね……――」
「おお！！そうだな」
すいません。私まだ何も言ってないんですけど？
また何か思い違いをしているのは確実に理解できる。

「皆の者。紹介が遅れてすまぬ。余の妻・美咲だ」
魔王の発表に、下にいたシリウス達の歓声が聞こえてくる。
やっぱり……
思わず頭を抱えてしまう。
私はただ、膝からおろして欲しかっただけなのに。

「おめでとうございます。魔王様、美咲様」
「うむ。あの者と違い、美咲なら良き余の伴侶になると思う。皆、美咲に手を貸してほしい」
「おおせのままに」
えっ？そんな簡単にいいの？私、女神じゃないよ。

「美咲、何かあったらすぐにこの者たちに言うのだ。そなたの手足となりこの者達が動くであろう」
「え……」
この時、私は自分が無責任に約束してしまった事を後悔した。
膝をついているこの数百人が私の手足となる。
まさか、そんな大ごとになるなんて。

「美咲、おめでとう。まさかこうなるなんて、私には予言出来なかったわ。魔界の事いろいろ教えるてあげる。さっそく、明日城下でも散策行きましょう。美咲に見せたい場所があるの」
「ありがとう」
シリウスの言葉に無理やり笑みを浮かべる。
ほんの短時間しかこの世界にはいなかった。
失礼な奴らだけど、彼らの事は嫌いではない。

でも――私は帰りたい。
せっかく入りたかった大学に奨学金を借りて通っているのだ。卒業したい。
祝福ムードのみんなには悪いけど……

「ねぇ、約束覚えてる？結婚したら元の世界に返して貰えるんでしょ？大学行きたいに戻りたいの」
「ん？美咲は大学に行っておるのか」
「そう。入ったばかり。家の事情で生活費は全部バイト代から出してるから、バイトも休めないし」
「そうか。約束は約束だ。余は守る」
「ありがとう」
「良い良い。美咲のためだ」
よしっ。
見事に心の中でガッツポーズが決まった。

「では、さっそく行くとするか」
「えっ！？もう」
「もう少し後にするか？」
「ううん。今すぐ戻りたい」
結婚してないんだけど、戻してくれるの？って聞こうと思ったんだけど、まぁ、いいや。

「では、シリウス。封鎖していた妃の間の改装を頼む」
「はい、かしこまりました」
部屋の改装をなんでシリウスに頼むのかが気になった。
見た目によらず、シリウスってそういう作業得意なのかな？

「美咲。美咲は部屋どういうのがいい？出来れば絵に書いてくれたり、資料くれたりして欲しいんだけど」
「部屋って？」
「美咲の部屋に決まってるじゃないの」
「……え。私、自分の世界に戻るんだよ」
「そうよ。荷物を取りにね」
ちょっと待って。
なんか、雲行きおかしくなってきた。

「荷物って何？」
「美咲の荷物に決まってるだろう。ちなみに、妃の間は余の部屋の隣だ」
「え？」
「もしかして、余と同じ部屋が良いのか？」
「違う！！話おかしいよ。私を元の世界に戻してくれるんでしょ！？」
「さっきも言ったぞ。余は約束を守ると」
「だったら、なんで荷物取りに行くの？まるでここに私が住むみたいじゃん」
「みたいじゃなくて住むのだぞ。ここを生活のベースとし、ここから大学とバイトに通うのだからな」
「もしかして、行ったり来たりって可能なの？」
「余は魔王だからな」
想定外だ。

まさか、そんな事が出来るなんて――

7　ならば、余の事を好きになればいい

「ごめん。結婚辞めよう」
「なぜだ？」
「私が女神じゃないから。魔王を部屋から出すために召喚されただけなの。ねっ、シリウス」
お願い。シリウス、助けて。
そんな願いがこの魔界で叶うはずもなく、シリウスの言葉によって沈められた。

「あら、女神補欠にでもしておけばいいじゃないの」
私はやっぱり、補欠なのか。
まぁ、女神仮とか言われてもいやだけどさ。

「ねぇ、そんな簡単に決めていいの？女神はたった一人だけなんでしょ？私と違って代わりなんていない存在なんだよ」
「そうね、女神はたった一人よ。でも、美咲もたった一人だけの存在だわ。誰かの代わりなんていないって事、美咲だって知っているでしょ？」
「そうだけど……」
「たしかに異例の事よ。魔界始まって以来、女神以外の人が魔王様の妃になった事なんてないもの」
「だったら――」
「だったら何？女神ってだけで、でかい面したただ綺麗なだけの女神。悪いけど、そんなお飾りは邪魔になるからいらない。私達が必要なのは、私たちを認めてくれる存在なの。美咲とは会って間もないけど、私たちを同等に扱ってくれた」
でも、今日あったあまり知らない人と結婚なんて覚悟はない。
ただ帰りたいから結婚するって言っただけだもん。

「魔王、私の事好きじゃないでしょ？」
「余と美咲は今さっき知り合ったばかりだぞ？」
「だよね」
世間では、ひとめぼれとかもあると思う。
でも私たちの間にはない。それはわかる。

「私は結婚するなら、ちゃんとお互い好きどうしでしたいの」
「たしかに、そなたの言う事は一理ある」
「でしょ？」
「――それならば、余の事を好きになればいいではないか」
え？
ふいに顎に手をかけられ、上向きにされたかと思ったら唇に何か触れた。
それがキスだとわかるのに、そう時間はかからなかった。

「～～～っ」
「おお。赤くなった。美咲はキス初めてなのか？」
「ち、違う！！急にするから！！」
「そうか。なら、次からは事前申告しよう」
鼻歌でも歌いそうなテンションで言うの辞めてよ。
なんか調子が狂っちゃうじゃんか。

「美咲が余の事を知らないように、余も美咲の事を知らない。だから、お互い知って愛し合い結婚しよう」
「そんなの好きになるかわからないじゃんか」
どんだけ魔王は自分に自信があるのよ。

「そうだ。好きになるかもしれないし、ならないかもしれない。だがまず、お互いを知らなければどちらにも転がらないという事だ」

たしかに正論だけど……
じっと魔王の顔を見る。
いたって真面目で、冗談で言っているわけじゃなさそうだ。

「……わかった」
「そうか。よし、今日から美咲は我が婚約者だ」
えぇっ！？これって婚約した事になるの！？違うよね！？

その後の彼らの暴走は酷かった。
婚約じゃないって言ってるのに婚約パーティーは開くし、『魔王様婚約。相手は女神補欠の美咲様。魔界には珍しい個性的な顔立ち』なんて失礼な号外新聞は発行するし。

8　無理は禁物

しかし、慣れって怖いな。
あんな事があったのに、ここの世界の会議に参加しているんだから。

「美咲様？何か策はありますか？」
「ごめん、私じゃ役に立たないや」
対面するように円卓に座っていたグレイルにそう言った。
今日帰ったら図書館で経済学の本でも借りてこようかな。
いろんな事勉強して理解しないと、会議に出ても役に立たないもん。

「そうですか……私達もお手上げなので、これは魔王様行きですね。
では、今日の会議はこれで終わりにしましょう。皆、御苦労さまでした。次回の会議は後日改めて連絡いたします」
グレイルの声に皆、席を立ち始める。
どうしようかな～。今日バイトないし。
左腕を見ると、時計の針は五時半を指していた。

＊
＊
忙しいよね……
例の女神様が置いていった負の置き土産山積みだもん。
それプラス、今まで魔王が引きこもっていた分。
私はため息を吐きだしながら執務室の扉を見る。
時間があったので魔王の執務室まで来ていた。

魔王が引きこもりを辞めて一ヶ月。
私もこっちの世界とあっちの世界を行き来する生活に慣れていた。
アパートは残すか迷ったんだけど、魔王に解約して浮いた家賃を貯金に回したり、自分に使えばいいと促されたので解約した。
そのおかげで、だいぶ助かっている。
前みたいにキツキツにシフト入れたり、バイトの掛け持ちしたりしないで済むから。
その分学校の勉強とかに時間を回せるしね。
そのため食事も就寝もすべて生活の基盤をこっちに移し、大学とバイトにこの世界から行くという形式になっている。
行き来するのはものすごく簡単だし。

私は鞄を開け、中をのぞく。
そこには、携帯や手帳それから鍵の束などが入っている。
鍵の束は自転車の鍵に、大学のロッカーの鍵、それから魔王に貰った空間の鍵の三つ。
この空間の鍵はどんな形のドアにも対応するように形を変える。
その鍵をドアにさし回せば、あっちの世界とこっちの世界へと通じる空間が出来るのだ。

「みちゃきさま。はいらないんでしゅか？」
「ルル」
ばさばさと何処から飛んできたのか、ルルが私の右肩に着地した。
「ん～。忙しそうだから辞めておこうかなって思ったんだ」
「まおうちゃま、ずっとおしごとばっかり。ぼく、しんぱいです」
「ルル……」
うな垂れたルルの頭を撫でる。

たしかに魔王はずっと仕事ばかりだ。食事もあまりとらないらしい。
部屋に寝に返って来ないで、執務室で仮眠取ってるみたいだし。

何度もベットでちゃんと寝る様に言ったんだけど、ベットだと起きれなくなるから執務室の机で寝ると言って言う事を聞いてくれない。
そりゃあ、魔王が職務放棄していた責任はあるよ。
でも、休む時は休まないと体に悪いと思う。
やっぱ今日こそはちゃんと休んでもらわないと……

「魔王〜？」
ノックをして部屋の中へと入る。
すると書類に埋もれている魔王の姿が書類と書類の隙間から見えた。
やっぱすごい量。書類が机にのりきれず、下の方まで束が続いている。

「ねぇ、魔王」
「まおうちゃま？」
私とルルが呼んでるのに返事をしない。
なるべく書類の束を倒さないように魔王の元へと近づく。
しばらくぶりに見る魔王の顔色は悪く、頬も少しこけているように感じだ。
充血した目で書類を追いながら、ペンを走らせている。

「魔王ってば！！」
耳元で叫ぶと、魔王の体が大きくビクつく。
「み、美咲……？」
「ねぇ、少し休もう。お茶と軽食用意して貰うから。そして、食べたら少し仮眠取ろう」
「余の事を心配してくれるのか？ありがとう。でも、心配無用だ」
魔王はそう言うと、またペンを走らせる。
ほんと強情。
仕方ない。こうなったら、強硬手段だ。

9　子羊はこうして騙される

私は足元の書類を端に退け、通路を作った。
このぐらいなら通れるよね。
よし。行くか。

ガシッと魔王が座っているイスの後ろを掴むと、そのまま扉へと向かう。
幸いこのイスにはローラーがついているため、私でも運ぶ事が出来る。
やっぱちょっと重いけど。

「美咲っ！？止めるのだ！！一体、何処へいく！？」
「も～、うるさい。食堂に行って何か消化の良い物食べさせてもらうの。それが済んだら寝室で睡眠」
「そんな暇はない。余は、まだ山ほど仕事があるのだ！！」
「だからうるさいって言ってるでしょ。ちょっと黙って。これ以外と体力使うのよ」
ほら、もう汗かいてきた。
大体、なんで城って無駄に広いのよ～。
絶対使ってない部屋とかあるでしょ。

「――！！」
何……？
執務室から出て十メートルぐらい進んだ地点で、急にイスが動かなくなってしまったのだ。
まさか、ローラー壊れたの？
しゃがみ込んでローラーを見て見るが壊れた様子がない。
「美咲、本当に時間が惜しいのだ。これは今までのツケが回ってき

た結果なのだ。だから、余の事は少し放って置いてくれ」
立ち上がった魔王は、今来た道を戻り始めている。
まさか、魔法使ったの！？ずるい！！

「待ってよ、魔王」
「美咲、だから時間が――」
振り返った魔王の胸倉を掴み、引き寄せると口を塞いだ。
想像もつかなかったのだろう。魔王は放心状態で固まっている。

「魔王は私の婚約者なんでしょ？」
「……あ、あぁ」
「だから、魔王の健康管理は私がするの。ちゃんと食べて、ちゃんと休んで。それからいっぱい馬車馬のように働いて。魔王の代わりはいないんだよ？力不足だけど、私も魔王の事サポートするから。ねっ、少し休もう。ルルもみんなも心配してるんだよ」
そう言って魔王の胸にすがりつく。
たしかに魔王が引きこもって皆に迷惑かけたのは悪い。
でも、だからって体に無理して仕事をするなんて――

「もし執務室に戻ったとしても、さっきみたいにイスごとまた引きずりだしてやる。何度だってやってやるから」
「ドアを蹴り破られそうになった時も思ったが、美咲は本当に強引だな」
クックッと喉で笑う声が聞こえる。

「美咲は何が食べたい？」
「え？もしかして食堂行ってくれるの！？」
「ああ。軽食を取ったら美咲の膝枕で眠るぞ」
「はいっ！？」
「美咲は余の婚約者なんだろ？だったら、婚約者の可愛いワガママ

ぐらい聞いて貰わねばなるまい。まさか、さっき自分で言ってた事を忘れたのか？」
「うっ」
言葉に詰まる。たしかに言ってしまった。
言ってしまったけど――

「膝枕なんて可愛いワガママの部類じゃない～～っ！！」
「……駄目なのか。それなら美咲を抱きしめて寝るから良い」
「はぁ！？なんでそうなるの！？」
「そんなに驚く事はないだろう。今夜から寝室も一緒だというのに」
「なんでっ！？」
「ここは魔界だぞ？魔界では婚約したら寝室は一緒と決まっている。美咲は余の婚約者ならそれが当たり前だ」
「そんな習わし魔王特権で無くしてよ！！」
「無理だ。美咲は余の事を婚約者と認めてしまった。そのため、契約が結ばれるのだ。契約を結んだ者たちはちゃんと習わし通りに過ごさねばならぬ。もし、それを破るなら恐ろしい災いが降りかかるぞ」
「……え」
「寝室一緒にして寝る他に、いろいろ決まりがある。まぁ、それは少しずつ教えていこう」
「恐ろしい災いって何！？」
落ちないために魔王の首にまわしている腕に少し力がこもる。
というか、怪我とかしてないから降ろしてくれても構わないんだけど。

「それは破ってみればわかるのではないか？」
「やだよ、災いなんて！！」
「安心してよい。余の言う事を聞いて、ちゃんと守れば大丈夫だ」
「……うん」

なんか魔界の災いって想像出来ないから余計怖い。
なんだろう。末代先まで呪われるとか？
でも、魔王の言う事聞いてれば安心だよね。
この時の私は、まさかそれが魔王のついた嘘なんて知る由もなかった。
だって、契約とか災いとか魔界の習わしとか言ってたし。

これからどうなるかわからないけど、私は魔王の傍にいると思う。
例の女神の問題もあるし、今後どうなるかわからないけど。
でも魔王がいるし、シリウス達もいる。
可能な限り傍にいたい。
それが恋のはじめなのかは、今はわかんない。
それはこれからゆっくり時間をかけて知っていけばいいことだ。

9　子羊はこうして騙される（後書き）

これにて完結です。

感想下さった方、お気に入りに入れて下さった方、そしてここまで読んで下さった方、ありがとうございました＞（　）＜

おまけ（前書き）

本編完結後　魔王視点。
ブログより転載です。

おまけ

「魔王様、この書類もお願い致します」
「あぁ」
せっかくさっき書類を一束片付けてあいた机のスペースに、シリウスが持ってきた書類が一束置かれた。これでまた左右と前方の視界がゼロにまってしまった。
書類の束は、未だ床にまで続いている。

またこれだ。
ひと山片付けたかと思えば、またひと山書類の束がやってくる。
終わりの見えない膨大な仕事量に時々発狂しそうになるが、これも自業自得の上職務なので無理やりでも書類を片付けなければならない。

「後どれぐらいあるのだ？」
一呼吸を入れ、目を手で覆いながら天を仰ぐ。
書類ばかり見ていたせいか、目がそろそろ限界に近い。

「――聞くとやる気が失せるぐらいの量です」
「……。」
聞かねばよかった。
そう思った時には、すでに遅い時ばかりだ。

――なんだか、そう聞くと急速に疲れが増えた気がするな。

「少し休憩されてはいかがです？今日はまだお休みになられてないですわよね。また美咲に怒られてしまいますわよ」
「そうだな」

仁王立ちしてガミガミ怒鳴っている美咲が頭の中に浮かびあがって、思わず噴き出してしまった。

「美咲は今、なにしておるのだろう？　」
ふいに口から出た言葉に、シリウスが目を大きく見開く。
そしてクスクスと笑い始めてしまった。

「魔王様は、ほんと美咲の事がお気に入りですわね」
「美咲はおもしろいからの。見ていて飽きない」
喜怒哀楽が激しい彼女は、本当に見ていて飽きがこない。
余が勝手に作った婚約者の掟を信じ込む純粋な面を見せたかと思うと、余の体を心配して泣きそうな表情を見せたり。
まぁ、大半は「お前ら魔族は本当に失礼だっ！！」と怒鳴っている事の方が多いかもしれないが。

たとえばこの間、美咲がルルに本を持ってきた時があった。
それは美咲達の世界にいる動物の図鑑だったんだが、その中に『ナマケモノ』という動物がいた。
余が一目見てそれを愛らしいと思い、「美咲はナマケモノみたいだな」と言ったらものすごい勢いで怒られてしまったのだ。
あの時は、しばらく口聞いて貰えなかった。

なぜ怒られたのか、余は未だにわからない。
だが眉を吊り上げて怒鳴り散らす美咲を、余はおもしろくてしょうがない。
美咲が感情をぶつけてくれるのが嬉しくてしょうがないのだ。
グレイルとシリウス以外、今まで周りの者達は余の事を気にしすぎて腫れものを触るような感じだったからな。
そんな美咲だから、余も傍に置いておきたいと思ったのかもしれない。

「入れ」
突然ノックの音が聞こえたので、入室を促した。
扉を開けて入ってきたのは、美咲だった。
美咲はポットとカップ、それに小さいお菓子の入った籠がのった銀のトレイを持っている。

「美咲。どうしたのだ？」
「そろそろ休憩の時間かなって思ったの。今、ちょうど三時だから」
あぁ、もうそんな時間か。
時間が経つのは早いな。

「もしかして取り込み中？」
「いいえ、大丈夫よ。書類置きに来ただけだから。それでは、魔王様失礼いたしますわ」
「シリウスもお茶飲んで行けばいいじゃん」
「今回は遠慮しておく。またね、美咲」
シリウスはそう言うとこちらに向かって一礼し、扉へと消えて行った。

「ねぇ、こっちで飲むよね？そっち置く場所ないし、書類汚れちゃうと悪いし」
美咲は応接用に置いてあるテーブルに、カップなどを並べていく。
カップ一つか。
転送魔法を使い、もうひとつカップをテーブルにのせる。

「え？誰か来るの？」
急に現れたカップを見て、美咲が首を傾げた。
「美咲の分だ。美咲も一緒にお茶しよう」
「うん。でも邪魔にならない？」

「ならん」
「うん。じゃあ、私もここで一緒にお茶させてもらうね」
仕事が忙しくずっとすれ違い生活で、ここ最近ほとんど美咲の寝顔しか見れてない。
声が聞きたいし話がしたいが、眠っている美咲を起こすのは可哀想なので、おとなしく美咲を抱きしめて毎日眠っている。
こんなせっかくの機会だ。
美咲とお茶をしながら、ゆっくりしゃべりたいではないか。

あの女がいる時が、こんな穏やかな生活が来るなんて思いもしなかった。
もちろん、あの忌まわしき日々が消えることはない。
だから余計、美咲とのこの些細な日常を守って行きたいと思ったのだ。
ゆっくり、余と美咲の距離を縮めながら――

番外編　君は誰？　前編（前書き）

これもブログからの転載です。

番外編　君は誰？　前編

もう外はすっかり闇に包まれみんな寝静まった午前3時。
私は魔王の寝室にある、大きなベットにしゃがみこみ頭を抱えていた。

誰この人――！！

さっきまで私が寝ていた所には、金髪の美青年がすやすやと眠っている。
しかもなぜか上半身裸。
下は履いているかは、シーツで隠れて見えない。

全裸かなんて確認なんて出来っこないし！！
ちなみに私はちゃんと寝巻のジャージを着用しているのは、さきほど確認している。

もしかして、魔王の知り合い？それでベット貸したとか？
でもそれだったら部屋余ってるのあるから、そっちを貸すか。
というか、そもそも魔王が寝室に人を通すわけないよね。私が寝てるんだし。

あ～。起きないで、ずっと眠ってればよかった……
私は起きてしまった事を激しく後悔していた。

さっきトイレに起きたんだけど、まったく最初わかんなかった。
てっきり魔王かと思ったんだもん。
あいつ、私の事抱き枕か何かのようにいつも抱きしめて寝るから。

何かいつもと違う違和感を感じ、月明かりをたよりに見てみる。
すると寝ていたのがこの青年だったのだ。

どうしよう……魔王呼びに行こうかな。
彼の姿はまだ寝室に見当たらない。
まだ執務室で仕事しているのかも。
私はなるべく物音をたてないように、ベットから降り扉へと近づいて行く。
そして金色のドアノブに手をかけた。
その瞬間、まだ力を入れてないのに扉が動いてしまった。

「あ。魔王」
「美咲？どうしたのだ？こんな夜更けに」
そこには片手で数冊の本を抱えるように持った魔王が立っていた。
私を見ると、目を細めて穏やかに笑う。
なんだろう？最近、魔王こんな表情見せるよね。

「え～と……――」
「眠れないのか？」
たしかにあんな光景見て、眠気はどっかに消え失せた。

「あのさ……」
言おうとしたら、ある事が頭によぎって言えなくなってしまった。
浮気してたって思われないよね！？
状況的にはそう思われてもおかしくない。

あ～。でも魔王は私の事好きとかじゃないから、そんな事思わないか。
なんて考えてたのを、数秒後に後悔した。

「美咲？」
ちゃんと言おうと口を開いた瞬間、まさかの人物に先をこされてしまった。

「――ん～……」

ちょい、待てっ！！お前はまだ起きるな！！
なんとさっきまでベットで眠っていた青年が、起きあがってしまったのだ。
まだ眠いのか瞼を擦っている。
っていうか、やっぱ全裸だったのか――！！

「みちゃきさま……？」
こちらを見ながら首を傾げるしぐさが、可愛い。
眠いのか言葉がちょっと赤ちゃんみたいだけど……
いやぁ～、これはかなり目の保養になるよ。
魔界の奴ら目の保養になるけど、あいつらかなり失礼だから。
それがマイナスすぎて、目の保養にはならない。

「――誰だ。お前は」
むしろ、貴方が誰っ！？
私はベットの上にいる人の事もそう思ったけど、今私の隣りにいる人もそう思った。
魔王の声と空気がまるっきり違う。
まるで冷たい氷につつまれているような感じ――っていうか、凍ってる！？
地面や壁が徐々に氷始め、部屋を浸食し始めている。
寒っ。下はまだ長ズボンのジャージだからまだ良い。
上、半袖のTシャツなんですけど～っ！！
両手をさすり、なんとか暖を取る。

「誰に許可を得てこの寝室におるのだ？しかもその格好。まさか、間男ではあるまいな？」
魔王が左手で何かを掴む素振りを見せると、細身の剣が何処からともなく出てきた。
ちょっ、マジで！？殺傷はマズイ！！

番外編　君は誰？　後編

「魔王、一旦落ち着こう！！怪我させちゃマズイって！！ねっ？」
「美咲。余は浮気は決して許さぬ。しかも余よりも先にこのどこの馬の骨とも知らぬ男が、美咲のやわ肌を味わったかと思うと気が狂いそうだ」
「味わうとか変な言い方しないで！！この人とは何にもしてないよ。ほら私、ちゃんと服着てるし」
たぶんという言葉は言わなかった。
自信なかったけど。

「それでは、夜這いの方か。良い度胸を持っておるな」
「少し落ち着いてってば！！」
魔王が剣を金髪の青年の首元へと向けると、氷が青年を囲むようにさらに浸食していく。
青年はその光景に声を上げて泣き出してしまった。
部屋中に響くぐらいの声量に、思わず胸を痛める。
そりゃあ、怖いよ。いきなり刃物突き付けられるんだもん。

「ねぇ、魔王。やめてよ。可哀想じゃん」
「美咲はこの男のかたを持つのか？」
「……だって泣いてるんだもん。それにちゃんと話聞いてあげてもいいじゃんか」
私がいくら頼もうが、魔王はそれでも剣を退けるつもりはないらしい。
魔王が嫉妬してくれてるのは嬉しいよ。
でも殺傷はまずい！！ちょっと誰か来てっ！！

「――夜更かしってお肌に悪いのよね」

「は？」
私の願いが通じたらしく、以外にも助け舟は早く来てくれたようだ。
急に聞こえてきたのはここにいるはずのないあの人の声。
その声に、私は後ろを振り向く。
するとそこには黒いショート丈のバスローブを羽織ったシリウスが立っていた。
やべぇ。色っぽい。
つい、胸と足に目が行ってしまう自分がおっさんに思える。

「魔王様。弱いものいじめは反対ですわ。ルルが脅えているではありませんか」
「はぁ！？ルル！？」
私も魔王の声が重なった。
ルル？この美少年が！？
たしかに、私は今日ルルと一緒に寝たけど……
魔王は剣を退けると、まじまじとルルを見る。

「まさか、レッドフールか？」
「おそらく」
なんだろう？レッドフールって。
魔王とシリウスの話に首を傾げる。

「ルル。あなた赤い星型の実食べなかった？」
「たべました……」
「あれは、レッドフールという果物なの。まだ人型になれない子供の魔族が食べると、人型になってしまうのよ」
「ルルはずっとこのままなんでしゅか？」
「安心しなさい。二・三日もすれば元にもどるわよ」
そう言うと、シリウスはルルの頭を撫でた。

「すまない、ルル」
眉を下げた魔王がふかぶかと頭を下げた。
「まおうちゃま……」
「冷静になれば、魔力でルルと判断出来るものを余は――」
「こわかったでしゅけど、もうへいきでしゅ。きにしないでくだしゃい」
偉いなぁ。ルルは大人だね。
というか、体はすでに大人。

「本当にすまない。詫びに人間界でルルの好きなおもちゃを買おう」
さて、これにて一見落着〜。
あ〜、やっとひと段落ついたからやっと眠れる。
なんか、ほっとしたら眠気も出てきたし。

「魔王様。謝罪を必要とする人物がもう一人おりますわよ？どうして私がここに来たと思ってますの？私の部屋、魔王様のちょうど下の階なんです」
「それがどうしたのだ？」
「眠ってたら、部屋が急に凍ってしまいましたの。それで寒くて起こされてしまいまして……元凶の氷の魔力をたどれば、魔王様のものでした」
凍るって、もしかしてこれ？
私は足元の氷を見る。

「それはすまない。シリウス」
「いいえ。お気になさらず。あぁ、でも魔王様。どうしてもお詫びがしたいというのなら、一週間ぐらいお休みが欲しいですわ。人間界のエステというものが気になってますの。もちろん、料金は魔王様が出してくださりますわよね」
「……わかった。考慮しよう」

「まぁ。ありがとうございます。では、私そろそろ戻りますわ。睡眠不足はお肌の大敵ですし。では、おやすみさないませ」
そう言って、シリウスは転移魔法を使って寝室に戻ってしまった。
あ、ルルも連れていっちゃったんだ。
さっきまでベットの上に居たルルの姿も無くなっている。

「美咲」
「あ～、うん。寝るよ」
でもどうやって寝よう？凍ってるんだけど……
あ。魔法でやったんなら、戻るか。

「これにサインしてくれ」
「は？」
寝るんじゃないんだ。
差し出されたのは、羽ペンと何が書かれているかわからない紙。
魔族の言葉なのか、読めない。

「サイン、書類の下の方でいいの？」
「あぁ」
言われるがままサインをして魔王に渡す。
すると魔王も何やら書きこんだようだった。

「ねぇ、これって何なの？」
「お守りだ。美咲のやわ肌には余以外触れる事のできないように」
「ちょっと！！また変な事を！！」
「余の体はもちろん、美咲以外には堪能させん」
「だから、そういう言い方やめてってば！！」
恥ずかしすぎるじゃん。
……でもまぁ、そういう事ならいっか。

だが、その書類が何なのか本当の意味を理解するのは、少し先――
私と魔王の結婚式前日の事。
魔王にこの紙を差し出され、私と魔王はもう婚姻関係を結んである
という事を告げられた時だ。

番外編　それぞれの恋愛のかたち。

「美咲。待つのだ！！」
その美声を無視して、私は足を速め館内を歩く。
左右は色鮮やかな魚とやたらデカイ魚が入った水槽、それから熱帯植物がディスプレイされている。
見たくてしょうがなかった展示物なのに、今では素通り状態。
せっかく入場料払ったのに。

……魔王がだけど。

「美咲」
いくら呼ばれても後ろを振り返る気はない。
私の気分を害したのは、全部追いかけて来るあの男――魔王のせいだからだ。
さすがにあのいつもの格好だと浮くので、人間界用に服を着用している。

「一体何をそんなに怒っておるんだ？」
「誰のせいだと思ってんのよ！！」
初めての人間界デート。
定番かな？って思ったんだけど、私達は水族館に来ていた。
すぐそこの広場でドラマの撮影をやっているせいか、館内に人の姿はあまりなくまばらだ。
これはラッキーだった。
だって人目をあまり気にする事なく、二人だけの時間を楽しむ事が出来るんだもの。
魔王は他の人から見れば容姿が整っている上に、髪長いし身長高い

しで目立つ。私がちょっとトイレとかに行って離れると、すぐに女の子に逆ナンとかされてる。
一緒に居れば、その容姿が半減するぐらいデリカシーがない事がわかるのに。

「誰のせいなのだ？美咲、安心するが良い。美咲の気分を害したものは余が――」
「魔王のせいだってば！！」
足を止め魔王を怒鳴る。
すると、魔王は目を大きく瞬きした。
「余のせいなのか？」
魔王は目を大きく瞬きしている。
こいつ、やっぱり気付かなかったのか……

本当に途中までは良い感じだった。
それが狂ってしまったのは、あの愛嬌がある顔の生き物――ウーパールーパーを見た瞬間。

魔王、なんて言ったと思う？
あいつ、「美咲がおる」って言ったのよ！？
婚約者をウーパールーパー呼ばわりするなんて。
どんだけデリカシーなければ気が済むんだ。
ペンギンコーナーに居たバカップルなんて、「あのペンギン、お前みたいに可愛いな」って言ってたのに！！
私はウーパールーパーかよ。
せめて似てたと思っても黙っておけっうの。

「――桜音は本当に水族館が好きなんだな」
「うん。大好き」
「そうか、俺も好きだ」

いらつきの中、聞こえてきたのは近くに居たカップルの声。
水族館という事もあってか、家族連れやカップルが圧倒的に多い。
何気なく聞こえてきたその声に足を止め視線を向けると、そこに居たのは長身のモデル系のイケメンと女の子だった。
二人ともサンゴ礁をモチーフにしたディスプレイがある水槽の前にいる。
その水槽には小さい熱帯の小魚が自由気ままに泳いでいた。

彼氏はイケメンだけど、彼女普通っぽいかも。
あ～、でもふわふわした感じで女の子って感じがするな。

「なんでこんなに可愛いんだろうな」
イケメン君は、彼女を見つめ呟く。
でもその甘い視線に気づかず、女の子は魚にくぎづけだ。
「ん～、なんでだろうね。やっぱり小さいから？暖かいところの魚ってカラフルで綺麗だよね。海は、何か好きな魚いる？」
いや、あの会話噛みあってないって。
たぶん、彼氏さんはあなたの事が可愛いって言ったと思うよ？
今だって魚じゃなくてあなたのほうばっか顔を緩ませて見つめているし。

「……いいな」
思わずぽつりと出た。
だってそうじゃん。
周りから見ても愛されてるってわかるぐらい愛されてさ。
まぁ、本人は気付いてない可能性あるけど。
それに比べて私と魔王なんて――
「美咲っ！！」

「何よ」
「まさか余と言うものがありながら、あのような男に現を抜かしたというではあるまいな！？」
魔王はさっきのイケメン君を指差す。
人を指差すなっうの。

「だったら何？」
売り言葉に買い言葉。
そんな事思ってるわけない。
まぁ、ちょっと羨ましいけどさ。

「美咲は余のものだ」
「――っ」
いきなり抱きよせられたかと思うと、唇を塞がれてしまった。
それは呼吸を忘れるぐらい突然の出来事。

「え、あ、え、え」
どうやら見られてしまったらしい。
本来なら一番戸惑うのは私のはずなのに、あの女の子の方が戸惑ってしまっているらしく、裏返った意味のない声が聞こえて来る。
さすがにここだとマズイ。
そう思ってすぐに引き離すが、また再び唇を塞がれてしまう。
独占欲なんてあるんだ。ウーパールーパーと一緒にしたくせに――

「か、海っ！！」
「ん？どうした？俺達もキスしょうか？」
「……え。そうじゃないってばっ！！私達お邪魔虫なの！！」
いや、邪魔なのは公共の場でキスしてる私達なので……
二つの足音が遠のいて行くので、あの二人はこの場を立ち去ってしまったのだろう。

どうしよう、せっかくのデート中だったのに悪い事しちゃったよ…
…ごめんね。

「美咲。余を捨てないでくれ」
やっと唇が離れたかと思うと、魔王の口からはそんな言葉が漏れた。
なんでそんな方向に話いくのかな？誰も別れるなんて言ってないじゃん。

「もし美咲が他の男に現を抜かしたら、余はその男を消す」
何を大げさなと言いたいが、前回のルルの件があるから本当にしそうだ。
だったらなんでそうやってウーパールーパー発言とかするんだろう？

「私じゃなくて、ウーパールーパーとキスすればいいじゃん」
「美咲は何を言っておるのだ？余は美咲とキスしただろ」
ああ、あれか。魔王の中ではもう、ウーパールーパー＝私か。
私、あんな顔なのかなぁ。
もう、だんだんわけがわからなくなってきたよ。
今度学校で友達に聞いてみようかな～？
私、ウーパールーパーに似てる？って。

「……もういいや。ルルにお土産買って行きたいし遊覧船にも乗りたいし、とにかく先進もう？」
私はいろいろあきらめて、魔王の手を握った。
執務室にこもっているからか、体質なのか魔王の手は色白だ。

「機嫌は治ったのか？」
「うん。まぁ、これも修行かなんかだって考える事にしたから」
何の修行かわかんないけど。
もしかして、私悟りの世界入ってる？

この分だときっと魔王と式を上げる時は、今より心広くなってるかもしれない。
……たぶん。

番外編　女神補欠の優雅じゃない日常（前書き）

パソコンのデータを整理してたら見つけたのでｕｐしてみました～。

番外編　女神補欠の優雅じゃない日常

――何、この広さ！！

城の一番端にある図書館。
そこに私は資料となる本を探しに来ていた。
図書館って言うから本がいっぱいあるってわかってたけど、これ広すぎでしょ。
あまりの広さに、部屋の端にいる人が豆粒ぐらいに見える。

一応辺りを見回してみるが、検索用パソコンなどは見当たらない。
やっぱ魔界にそんな便利グッズなんてないよね。
仕方ない。端から端まで探すか。
そう思って足を進みかけると、「美咲様」と声をかけられてしまった。

この声――

「グレイル」
振り向くと、グレイルが立っていた。
両手に大量の本を抱えている。どうやらその本を返しに来たみたいだ。

「珍しいですね。美咲様が図書館にいらっしゃるなんて」
「うん。本探しに来たんだ。あっ。ねぇ、グレイル。魔力を上げる方法が載っている本ってない？」
グレイルなら良く図書館に行くみたいだし、博識だから何か知っているかもしれない。

「美咲様は魔力を上げたいのですか？」
「私じゃないよ。私、人間だから魔力なんてないもん」
「では、一体誰が……？」
「え？魔王」
ここの最近、魔王の魔力消費率が激しい。
こまめに補充するなら、魔力を上げてしまえばそんな頻繁に補充しなくても済むと思ったのだ。
魔力消費するとすっごく疲れるらしく、見てて痛々しいんだよね。

「美咲様。魔王様の魔王っていうのは、名前ではないですよ？所謂、美咲様の世界で言う職業です」
「どうしたの？急に。知ってるよ。魔王の名前は、ディアスでしょ」
名前で呼んでほしいって言われるけど、ずっと魔王って呼んでたからこっちの方が呼びやすくて、つい魔王って呼んじゃうんだよね。

「わかってはいらっしゃるようですね。では、ちょっとこちらにいらっしゃって下さい」
「？」
私はグレイルの後におとなしく着いて行く。
グレイルが何か呟くと、ふわふわと机の上に何か描かれた紙がのった。
地図？
それは城や城下町などがアバウトに描かれた魔界全体の簡略地図だった。
子供用なのか可愛いイラストで描かれている。

「今、美咲様がいらっしゃるのは、ここです」
グレイルの指先は、城のイラストへと向けられている。
「魔王様が城を中心として、魔界全体に結界を張っておられるのはご存知ですか？」

「うん」
それは前に聞いたことがある。
もしもの時のために、念のために結界を張っているって言ってた。
「他にも城下及び禁忌の森など数十か所に部分結界を張っておられます」
「へ～。そうなんだ。だから、魔力の消費激しいんだね」
「美咲様。その上、魔王様は魔界と人間界の門も封印していらっしゃるんですよ？」
それはもちろん知ってる。

「ごめん、グレイル。何が言いたいのか、よくわかんない」
「つまりこれだけの結界を張ると言う事は、かなり魔力を消耗する事なんですよ。魔王様はそれを維持しておられます」
「うん、知ってる。だから魔王ってばいつもへとへとになるから、私が呼ばれるんだもん」
そのたびに私が呼ばれて、魔力補充される。
だから魔力があがればそんなに疲れずに済むかと思って、今回その方法を探しに図書館に来たのだ。

「魔族は魔力を持っているので、誰でも結界は張れます。ですが、こんな魔界全体を覆うような大規模なものは張れません。その上、数十か所小規模結界に封印なんて……これは魔王様だから、出来る事なんです」
「ごめん。本当に何が言いたいのかわからない」
「――つまり、それが出来るあの人の魔力は底がないんですよ。だから、『魔王様』なんです。こんな事ぐらいで魔力消耗して弱ると言う事はありません。現に、美咲様に魔法をかけられその上結界をはるぐらいの余裕を持っているぐらいです」
……え。私、魔法掛けられている上に、結界張られてるの？

全然聞いてないんだけど。
――って、今はそれどころじゃない～～っ！！
「じゃあ、何？あれ全部演技だったの！？」
思いっきりグレイルの胸倉を掴んで揺さぶり問い詰める。
いつも呼ばれるたび、疲れ切った魔王を見て胸を痛めてたのに！！
あの魔王、実は無害な顔して腹黒なのか！？

「落ち着いて下さい。第一、どうやって美咲様が魔力の回復なさるんですか？仮に魔力を消費したとしても寝れば回復しますよ？」
「は？寝れば回復するの？キスすれば回復するんじゃなくて？だってそう魔王が……」
話がおかしいんだけど。
魔王の話では、魔力というのは気の一種だから元気な人に分けて貰うと回復するって話だった。
そのため、キスして分けて貰わなければならないって。

「あの嘘つき魔王め～～～っ！！」
「お、落ち着いて下さい。魔王様だって悪気があったわけではないかと。これもひとえに美咲様からキスして頂きたいと思われての行動です。ほら、美咲様から魔王様にキスするのってあまりないじゃないですか。いつも何でも魔王様からですし」
「だって前から恋愛に対して受け身みたいな感じだったんだもん。だから自分からキスとかした事あんまりないから、どうしていいかよくわから……――って、なんでグレイルがそんな事知ってんのよ！？」
おい、ちょっと待て。
なぜ私と魔王の恋愛事情について知ってるんだ！？
もしかして魔界はなんでもオープンなのか？

ハズイ。ハズすぎる。なんだ、この公開処刑は。
まるで、母親か誰か身内に恋愛事情を知られている気分だ。

「魔王？魔王がしゃべってるの？」
「え、あ。……まぁ、いいじゃないですか。ちょっと零すぐらい」
「良いわけないでしょうがっ！！」
「お待ちください、美咲様」
私は泣きすがりつくグレイルの制止を聞かず、執務室へと走った。
どんだけデリカシーが無いんだよ、あいつは。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1537m/

その者を引きずり出せ

2010年11月26日19時35分発行